

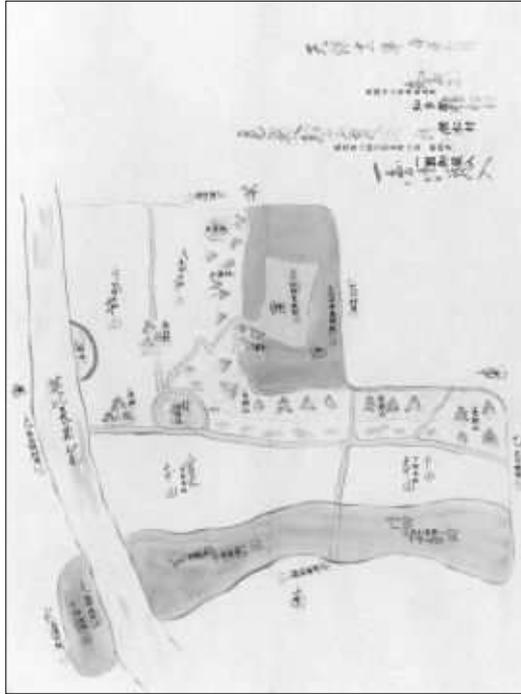
シリーズ

阿久比を歩く ㊦



“村西池”の跡地はゲートボール場に

介されている村絵図 天保十二年一八四一に描かれた阿久比十六カ村を見ながら、昔と今を比べて一地区ずつ歩くことにした。
横松村絵図を見ると中央に「乙川村境」から「英比大河筋」まで道が伸びている。現在、横松地区の公民館や遊園地、神明社の前を通る道だろう。この道を東から西に向かって歩いた。



横松村絵図 阿久比町誌資料編1 村絵図解説書から)

村絵図を歩く(横松村)

あ
ぐ
い
ぶ
ら
り
旅

次は地図にある「毘沙門」を探すことにした。北に向かって少し歩くと一本の木が生い茂り、地面には基礎らしき跡と瓦のかけらが落ちている場所にたどり着く。ここに毘沙門があったと思うが確証がない。近くの民家を訪ね聞いてみることにする。二人のおばあさんの話から「毘沙門」の存在を突き止めることができた。「あそこに毘沙門さんがいましたよ。伊勢湾台風でお堂が壊れて、神明社

村絵図には北側には山、南側には田がある。風景は昔も今も変わりない。
ゲートボールを楽しんでいる皆さんの声が聞こえてくる。場所から考えると、昔「村西池」があった付近だろう。プレーの合間に男性に聞いてみた。「昔の村絵図を見ると、この辺りに池があったようですが」と尋ねると、「あ、たよ。山車のゴマは知ってるかなあ。車輪なんだけど、祭りが終わった後その池に沈めて保管してたなあ」と昔を懐かしむように話してくれた。

疑問は晴れた。再び神明社に戻り社の中をのぞいた。姿は暗くて見えない。しかし、確かに毘沙門はいることだろう。毘沙門はインド神話では財宝の神といわれる。ぶらり旅に出る前、友人に昼飯をおごった。財布の中はさみしくなっている。見えない毘沙門に「宝くじがあたりますように」と軽く頭を下げた。

早速、神明社に向かう。毘沙門らしきものはどこにもない。神社に仏像？疑問は残る。ここで帰ってしまうのも悔しい。聞き込みを続ける。「毘沙門さんを社(神明社)の隅に置いてまつたからいるはずだよ」と伊勢湾台風があった当時、区長だったおじいさんの話を聞くことができた。

に移ったらしいけど見たことはないなあ」



村絵図 毘沙門”の跡地

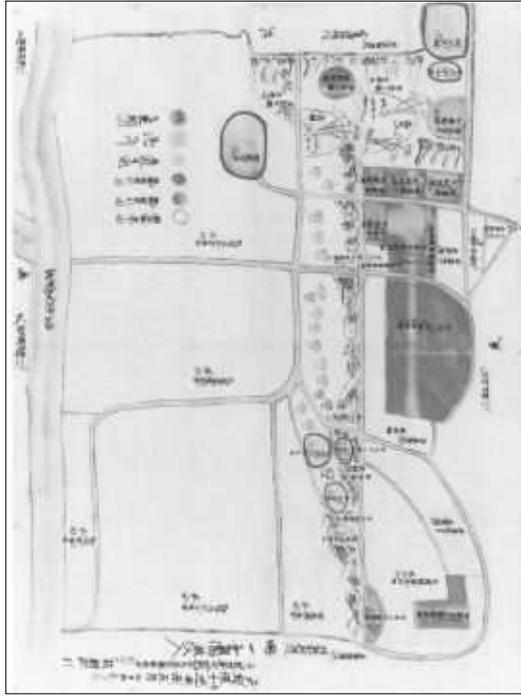
シリーズ

阿久比を歩く ㊤



細い坂道

今回は萩村絵図を見ながら、萩地区を歩くことにした。
春祭りに引き回される萩大山車が収納されている場所から、山神と記されている方向へ向かう。
山神があつたと思われる付近は現在、大山祇神社がある。神社に立ち寄り、さらに北へ向かうと法久院がある。村絵図には記されていないが山神と白山の中央辺りだろう。
法久院の境内で絵図を眺めている



萩村絵図 阿久比町誌資料編1 村絵図解説書から)

村絵図を歩く(萩村)

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

寺を後にして南へ戻り、細い坂道を東の方へ上つて行く。両側にはがけの壁ができ、その上には民家がある。陽を遮り、暗くなった歩道はトンネルの中を歩いているような錯覚に陥る。自動車も通れないくらい狭くて圧迫感のある道だが、昔ながらの情緒ある雰囲気が残っている。
坂道は息が切れる。汗が出てきたので上着を脱ぎ、マフラーを取る。

と、犬が近寄ってきた。寺の番犬だと思いが私たちに吠える様子もなく足元でじゃれつく。犬は正直だ。なぜだか私たちには吠えない・・・頭をなでる。
女性の住職に村絵図(一八四一年作製)を見てもらい「絵図にはこの寺はないですね」と尋ねると「一八四五年に作られた弘化萩村絵図には白山の中腹に青龍庵(当時の法久院)と山神があります。森に囲まれた中の小さな、庵だから、地図を作る人が見つけ出せなかったのかもしれないですね」と笑いながら話してくれました。

再び出発地点まで戻り、絵図の中央にある道を南に向かって歩き、常夜灯付近で今回のぶらり旅を終えた。今日は暖かく、いい日だった。しかし、本格的な春が来るまでには少し時間がかかるかもしれない。なぜなら私の鼻がむずむずしないからだ。(不思議なくらい春の訪れとともに花粉を感じする利きのいい鼻である。)

畑で大根を抜き、切干大根を作る女性がいた。絵図の東側には田畑が多く、今もあまり変わっていない。「向こうの細い道を降りて行くと、山車がしまつてある建物のところまで行きますよ」と女性に道を教えてもらう。



小高い丘から眺めた風景

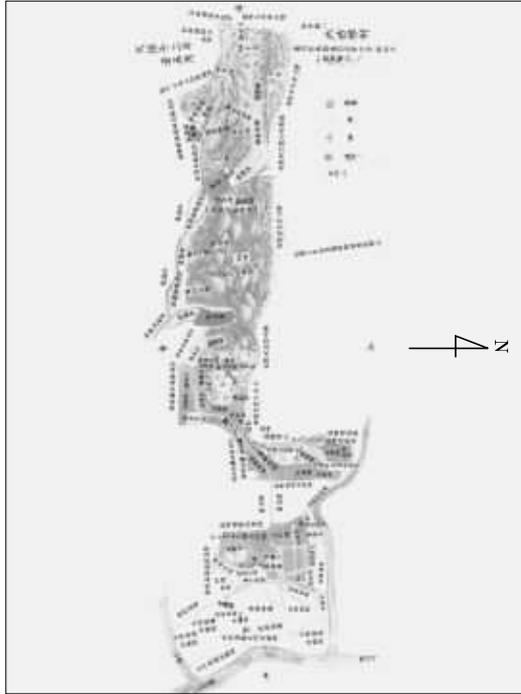
シリーズ

阿久比を歩く ②4



八幡神社の常舞台

今回は大古根村絵図を見ながらぶらり旅に出掛けた。
絵図を見ると、この村は東西に長く東の方は川に囲まれた形で田が広がり、その横に集落が見られるのでこの辺りを中心に歩くことにした。
まずは絵図にある蓮慶寺を目指す。きつい坂道を上りきった場所に寺は建つ。沿道から見える畑に、菜の花が色鮮やかに咲く。民家の花壇にはスイセンの花がちょうど見ごろを迎



大古根村絵図 阿久比町誌資料編1 村絵図解説書から)

村絵図を歩く(大古根村)

あ
ぐ
い
ぶ
ら
り
旅

え、順番を待つのかのようにチューリップの芽が顔をのぞかせている。春はもうそこまで来ている。(私もついに花粉を感じし、目の周りがとてもかゆい。確実に春到来。)
寺の境内をぐるりと周り、次に八幡社へ向かった。細い道を通り抜け神社に着く。
東側入口の看板で神社の由来を読む。社伝によると菅原道真の孫、英比丸が英比郷を開くと、その四男菅原道清が、天曆五年(九五一年)古新田村から八幡社を移して氏神とした」とある。
境内には立派な入母屋造の屋根で、東を正面にした常舞台(神楽殿)が建っている。神社拝殿前には狛犬が左右に置かれ、その後ろには道真の愛した梅がちらほらと咲き始めている。

絵図に地藏堂が現在の上ヶ畑辺り、薬師堂が八幡社の隣にあり、そこに入っていた「薬師如来立像」と「地藏菩薩」が、今は八幡神社から県道を挟んで南側の薬師堂に安置されて

え、順番を待つのかのようにチューリップの芽が顔をのぞかせている。春はもうそこまで来ている。(私もついに花粉を感じし、目の周りがとてもかゆい。確実に春到来。)
寺の境内をぐるりと周り、次に八幡社へ向かった。細い道を通り抜け神社に着く。
東側入口の看板で神社の由来を読む。社伝によると菅原道真の孫、英比丸が英比郷を開くと、その四男菅原道清が、天曆五年(九五一年)古新田村から八幡社を移して氏神とした」とある。
境内には立派な入母屋造の屋根で、東を正面にした常舞台(神楽殿)が建っている。神社拝殿前には狛犬が左右に置かれ、その後ろには道真の愛した梅がちらほらと咲き始めている。

大古根地区で「おやくさん」と呼ばれる薬師堂の中で、おばあさんが二人こたつに入り、にこやかに会話をしていた。
声を掛けると外に出てきてくれた。「毎日ここに来て、おやくさんたちといっしょにいるのが日課ですよ。」「歳も八十を超えました。元気で暮らせるのもここで遊ばせてもらっているおかげかな」と気さくに話をしてくれた。
帰り際「これから元気で長生きしてくださいね」と私たちが言うと、「あなたたちも、お仕事がんばってくださいね」と激励された。おばあさんたちは、私たちの姿が見えなくなるまで手を振ってくれていた。(おもわず胸が熱くなった。)



おばあさんたちの憩いの場 おやくさん”

シリーズ

阿久比を歩く ㊥



谷性寺に咲く 梅の花

最近、広報の取材先で皆さんから、「ぶらり旅読んでますよ」と声を掛けられるようになった。うれしい限りだ。今回は宮津村絵図を見ながら歩いた。

萩村境から北へ向かって歩き始める。周りは雑木林で囲まれている。舗装されていない道にはどこからか水がわいているのか水分を含んで湿っている。やがて谷性寺が見えてきた。



宮津村絵図 阿久比町誌資料編1 村絵図解説書から)

村絵図を歩く(宮津村)

あ
ぐ
い
ぶ
ら
り
旅

村絵図には谷性寺横には、はっきりと太い線で道がある。現在もほぼ変わりなく道が続いている。

道の突き当たりで左に曲がり、西へ行く。光西寺を横切る。この辺りには、見上げるほどの黒い板壁の家屋が見られ、古い町並みの景観が残されている。

村絵図に氏神と記されているのは、現在の熱田社。ここまで来て、再びもとの道に戻り、宮津の「メインストリート」を歩く。

集落を南北に通じる道の両側には金物屋、酒屋、呉服屋、雑貨屋などが並び、「阿久比の江戸」と呼ばれていたそうだ。今はかつてのにぎやかな商いのまちは全くイメージを変え、静かな雰囲気になっっている。

「小学生の時に母親といっしょに体操服を買いに来たのがこの辺りで、魚屋さんもあそこにあったかな」と友人が二十年前の少年時代を懐かしんでいた。

いつもなら誰かと出会い話しをするところだが、今日は誰にも会わな

い。友人と二人だけで寂しいぶらり旅。猫の子一匹にも会わないとはこのことを言うのだろうかと言談を言っていた矢先、丸々と肥えた猫が目の前に現れた。(うわさをすれば影。)

北組山車蔵の前に庚申堂がある。村絵図にも庚申とある。厨子に納められた木造「青面金剛」が安置されていたらしいが盗難に遭い今はない堂をのぞくと写真が飾られている。

蟹田川にたどり着く。阿久比川に向かつて川沿いを歩く。鳥たちが飛んでいる。えさとなる虫たちが冬眠から覚めて動き始めたのだろうか。

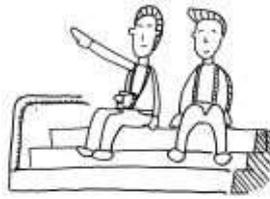
北の方角には区画整理が進み、新しい家が少しずつ建ち始めている。何年か後には、現在とは全く違った姿になるだろう。変わりゆく風景を目に焼き付け今回のぶらり旅を終えることにする。



宮津のメインストリート

シリーズ

阿久比を歩く ㊤



阿弥陀立像の浮き彫りが見られる道標



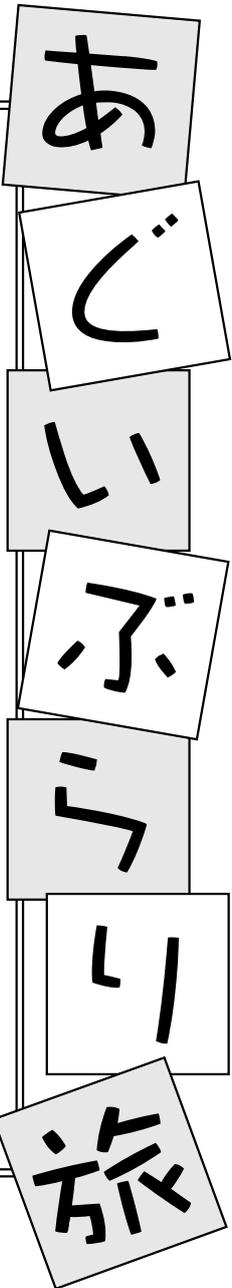
植村絵図 阿久比町誌資料編1 村絵図解説書から)

今回は植村絵図を見ながらぐらぐらりに旅に出掛けた。

阿久比町誌村絵図解説書に、岩滑新田堺(半田市岩滑新田)に近い西長子に道標があり「右大の 左とこなべ」と刻まれ、上部に阿弥陀立像の浮き彫りがあるという記述がある。その「道標」探しから始めた。

村絵図では場所が確定できないため、現在の地図を片手に西長子付近を探る。とりあえず道があるところ

村絵図を歩く(植村)



を歩いてみる。それらしきものは見つからない。半ばあきらめかけ、私があの家を訪ねて聞いてみようかと友人に話しを持ちかけると、彼は突然「あ、あ、あの石、何ですかね」と、大声を出して前方を指差す。舗装されていない道路脇の草むらの中に隠れるようにして、膝丈くらいの高さの石を見つける。

石に付いている泥を手で払うと、解説書の記述どおり上部に阿弥陀立像らしき姿が現れ「右大の 左とこなべ」の文字も読み取ることができ。回り道をしたが探し物をようやく発見。

私たちの立っている位置からは、道標の示す場所に行ける道はない。かつて道先案内役を務めた道標に彫られた「仏さん」の顔は、どこか寂しそうな表情に感じ取れた。「お疲れさま」と声を掛ける。

次に村絵図に「権現」「神明」と記された東の方へと向かう。陽気はまさに春。道沿いの菜の花にはミツバチが止まり、西洋タンポポの周りを

歩いてみる。それらしきものは見つからない。半ばあきらめかけ、私があの家を訪ねて聞いてみようかと友人に話しを持ちかけると、彼は突然「あ、あ、あの石、何ですかね」と、大声を出して前方を指差す。舗装されていない道路脇の草むらの中に隠れるようにして、膝丈くらいの高さの石を見つける。

石に付いている泥を手で払うと、解説書の記述どおり上部に阿弥陀立像らしき姿が現れ「右大の 左とこなべ」の文字も読み取ることができ。回り道をしたが探し物をようやく発見。

私たちの立っている位置からは、道標の示す場所に行ける道はない。かつて道先案内役を務めた道標に彫られた「仏さん」の顔は、どこか寂しそうな表情に感じ取れた。「お疲れさま」と声を掛ける。

次に村絵図に「権現」「神明」と記された東の方へと向かう。陽気はまさに春。道沿いの菜の花にはミツバチが止まり、西洋タンポポの周りを

白いチョウが飛び回っている。「権現」とあるのは現在の五郷社。新美南吉の童話作品に出てくる「こんぎつね」がすんでいた森でもある。地元の人には「権現さん」と呼んでいる。長い石階段を上り森の中へ進む。

鳥たちのさえずりが聞こえる。土手にはつくしが生えている。家族へのみやげにとつくしを採り、ティッシュペーパーに包んでかばんにしまう。

五郷社を後にして「神明」とある現在の神明社の方へと歩く。わずかな距離の間に二つ神社がある。両方とも高台に境内があり、そこから眺める矢勝川沿いの景観は素晴らしい。今日は「つくし」というみやげができた。妻に卵とじでも作ってもらい、晩酌しながら旬の味を楽しもうと思う。(結局、つくしのはかま取りは私の仕事となった。)



菜の花に止まるミツバチ

シリーズ

阿久比を歩く ㊤



箭比神社の森

各地区で春祭りが行われ、風に乗って笛や太鼓の祭り囃子が聞こえる日曜日、矢口村・高岡村絵図を見ながら、いつものように友人と二人でぶらり旅に出掛けた。



矢口村・高岡村絵図 阿久比町誌資料編1 村絵図解説書から)

村絵図を歩く(矢口村・高岡村)

あ
ぐ
い
ぶ
ら
り
旅

次に矢口村氏神へと向かう。この氏神は先ほど老人が昔を懐かしんでいた箭比神社。

は両地区を歩くことにした。矢口地区の済乗院辺りを歩いてみると、一人の老人に出会う。「どちらへ行かれますか」と尋ねると、「この先のミカン畑へちよつとね」と応えてくれ、しばらく立ち話をする。



“おこり”の伝説が残る赤鳥居

赤鳥居が、ありこれをくぐると、「おこり」にかかると言い伝えが残っている」と意味深な表現がある。桜の花びらでピンク色に染まった石段を社守の男性が掃除をしていた。鳥居のことを聞くと、「赤鳥居をくぐると、ばち」が当たると昔から言われているよ」と教えてくれた。

シリーズ

阿久比を歩く ②⑧



あぐいぶらり旅

村絵図を歩く(矢口村・高岡村)



牛の像の奥にまつられる山之神

矢口村を後にして村絵図に記されている高岡村山之神に向かう。舗装されていない細い道を上ると墓地が現れた。少し先には観音寺の屋根が見える。
畑で草取りをする老夫婦に「この辺りに山之神があつたみたいなんですけど知りませんか」と尋ねる。「兵隊さんが出兵する前に、あの雑木林の辺りまで歩いて行ったのを見た記憶があるよ」と教えてくれた。



矢口村・高岡村絵図 阿久比町誌資料編1 村絵図解説書から)

氏神に着く。現在の天満社で境内の看板には「祭神は菅原道真。社伝によると、創建は天曆一年(九四八)菅原道真の孫英比丸が高尾山の自然と眺望を愛しこの地に神殿を造営した」と由来が書かれている。
境内敷地には昨年高岡地区で行われた「虫供養」の大塔婆が残っていた。公園で遊んでいた姉妹を迎えに来た「おじいちゃん」に声を掛けると、地区の氏子であることが分かる。
先ほどの山之神について再度尋ねてみた。寝そべっている牛の像の奥を指差して「あの神さんがそうだよ。あの場所からこの天満社に移したんだよ。まだ林の中に社跡が残っているはずだよ」と話してくれた。老夫婦の話ともつじつまが合った。
天満社のすぐ横は、知多四国八十八所第十七番札所の観音寺がある。絵図に記された観音堂である。私たちが一年前に町内の札所五カ所を巡り「シリーズ阿久比を歩く」の連載を始めた際に訪れた場所だ。そうい

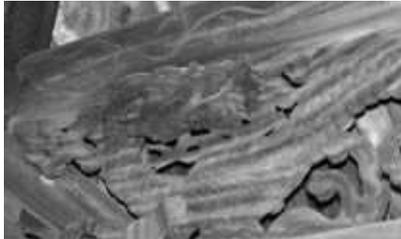
えば新聞でも記者が知多四国を歩いて体験記を連載していたが、私たちが先。先見の明があつたのかも。寺の参道の高台から南東を見る。桜は花が散り、葉桜と変わっている。大型スーパーの看板が目につく。その昔、スーパーの辺りは入江になっていたらしい。英比丸公が別荘地として選んだこの地だけに、高台から望む景色は絶景だったに違いない。
参道を下ると地藏堂があつた。中をのぞくと「子育て地藏菩薩」がふくよかな顔に笑みを浮かべ、子どもを抱いている。
今朝、家を出る前に姉妹げんかをする自分の娘たちを大きな声でしかつた。常に笑顔で良き親になりたところだが、最近子どもたちが少し反抗期だ。子育ては難しい。地藏さん“をしばらく眺めて帰路に着いた。



正面が観音寺。右の森为天満社

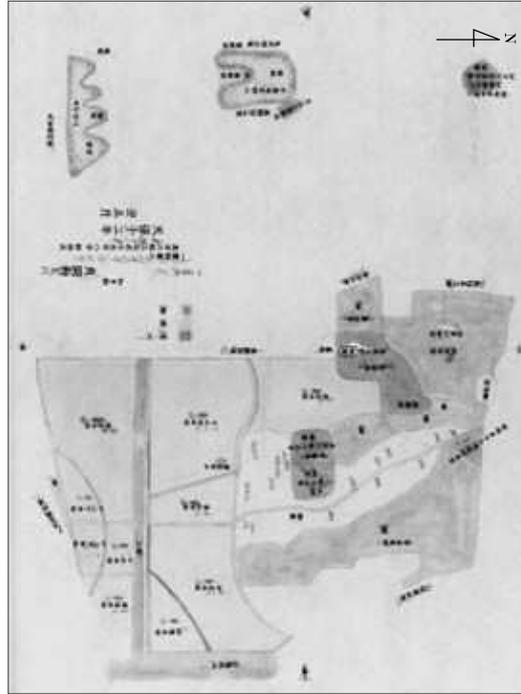
シリーズ

阿久比を歩く ㊤



雲谷寺山門の彫刻の龍

今回は角岡村（現在の大字椋岡地区西部）絵図を見ながらぶらり旅に出かけた。最初に雲谷寺を訪れた。山門の上から龍が私たちをのぞいている。門の正面部分にある彫刻の龍である。寺の山号が「龍臥山」。龍と縁深いようだ。
住職から龍にまつわる話を聞く。室町時代、多くの水墨画を描いた画僧、雪舟がこの地を訪れた。雨が降



角岡村絵図 阿久比町誌資料編1 村絵図解説書から

村絵図を歩く(角岡村)

あ
ぐ
い
ぶ
ら
り
旅

らず農作物が育たないと村人が困っている、雪舟は衣ヶ池（現在の丸山公園付近）のほとりで雨乞いを始める。願いはかない雨が降り出す。池の中から昇天する龍神を見て雪舟は「龍之画」を描いたと伝わる。
雲谷寺には、この画が寺宝として残る。すごい形相で天に昇っていく龍の姿が描かれていますよ。日照りの時に出してコップいっぱい水に張り、七日間祈願すると必ず雨が降つたので、「雨乞いの龍」と言われています」と住職が話してくれた。
広い境内を散策する。今日は五月の第二日曜日で「母の日」。六地藏にはピンク色のカーネーションが供えられている。そのすぐそばには池がある。龍ではなくカメが長い首を伸ばしていた。
次に平泉寺と氏神と記された場所に向かう。
平泉寺は知多四国第十六番札所。源頼朝が野間大坊（美浜町）に父義朝の墓参りの帰途に訪れ、中秋の名月を眺めた場所である。県指定文化

財の不動明王立像などの仏像でも有名だ。
線香のにおいが境内に広がっている。参拝者とあいさつを交わし、平泉寺を後にして氏神を探した。
細道のブロックに腰掛け、会話を
する高齢の男女に尋ねると、平泉寺東の民家付近を指差して「氏神はこの辺りにあったと聞くよ。わしもまだ若いからそんな昔のことは知らないなあ」と冗談を言いながらおじいさんが応えてくれた。現在は椋岡地区の八幡神社に移転。）
地図を南下して唐松の井戸に着いた。田んぼの脇に四方を柵と石で囲まれた古井戸が残る。
この井戸は慈覚大師円仁の祈とうにより水が湧き出し、農民を日照りから助けたと伝えられる。緑色に濁った水の表面をアメンボウが飛び跳ねていた。



唐松の井戸

同じ村の中に雨にまつわる伝説が二つあった。村人が昔から、水の確保に大変苦労していたことが伝わってきた。

シリーズ

阿久比を歩く ③⑩

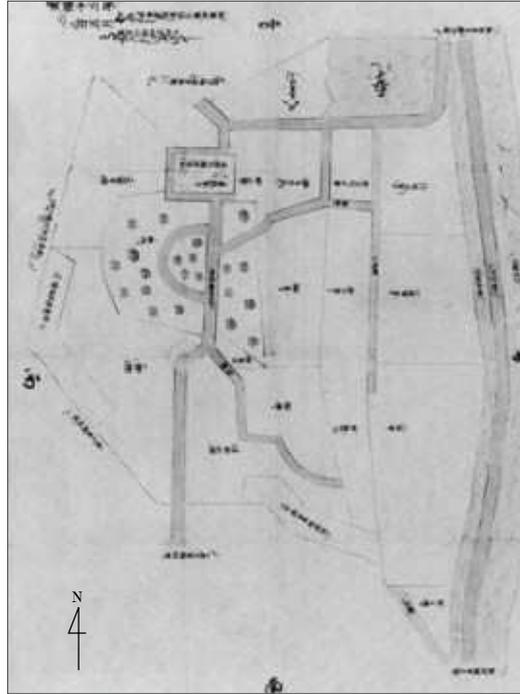


阿久比川横に広がる田畑は昔と同じ

ゴミゼロ運動に参加した後、雨がやむのを待って、棕原村（現在の大字棕岡北部地区）の絵図を見ながらぶらり旅に出掛けた。

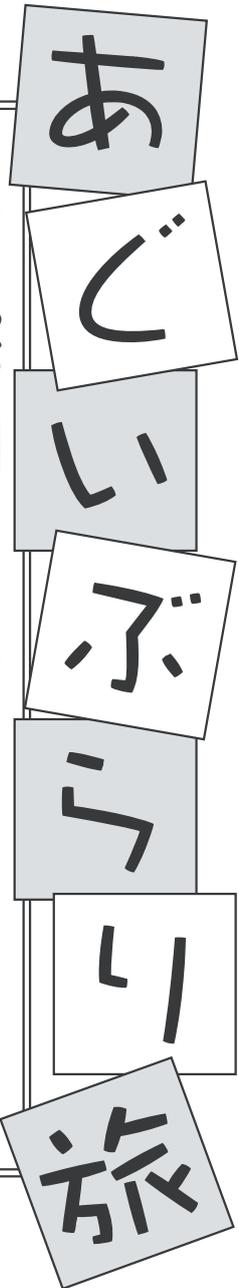
絵図には東部分の大半に田や畑が記され、東端には英比川が流れている。現在も阿久比郵便局から南方は名鉄電車の線路と阿久比川の間に田畑が広がる。

田植えが終わった水田をのぞくと、小さなオタマジャクシが何十匹も寄り集まって、しっぽを勢いよく振って動き回り、遠くからカエルの鳴き声が聞こえる。



棕原村絵図 阿久比町誌資料編1 村絵図解説書から)

村絵図を歩く(棕原村)



正保寺境内へ入ってすぐ左に地蔵堂がある。村内に野ざらしになっていた石地藏尊や千体地蔵が納められている。

入口に鍵がかかっていたいなかったの戸を開けて中を見る。その瞬間、安置されている石地藏の目線が一斉に私たちの方向に向けられたような錯覚を感じた。多くの目に見つめられると悪いことはできない。何か、隠し事をしてませんか」と訴えかけているようだ。(中性脂肪が多くてダイエツト中の私。昼食後、妻に内緒でアンパン一個食べたことを地藏さんたちに白状した。)

奥の本堂へと進む。本尊は秘仏の薬師如来で、眼病を治す仏として近

り集まって、しっぽを勢いよく振って動き回り、遠くからカエルの鳴き声が聞こえる。

薬師堂と八幡宮と記された場所を訪れた。薬師堂は現在の正保寺で、八幡宮は角岡村の氏神といっしょに現在の棕岡地区の八幡神社に移されている。

正保寺の参道に庚申堂がある。堂の中には石像がまつられていた。石像は青面金剛と呼ばれ、子どもたちがいたずらをしてたたりが起ったために、堂を建てたと伝えられる。昭和十五年ころまで村の各家に木造の青面金剛を持ち回る「庚申講」も行われていたらしい。

石像の顔が青ではなく赤くなっていた。誰かのいたずらだろうか。少し寂しい気持ちになった。

名古屋往來道と記された道を歩く。かつては名古屋へ続く主要道として多くの人たちが行き来した道。近所の人たちが玄関先で立ち話を楽しそうにしている。今は車の通りも少ない。先を急ぐことなく大きなカタツムリがのんびりと道を横断していた。



庚申堂にまつられる青面金剛の石像

シリーズ

阿久比を歩く ③①



“山上”から向山に移された役行者像

今回は板山村絵図を見ながら「ぶらり旅」に出掛けた。絵図の中央には東西に通ずる道が記されている。東の端、有脇村境から西の端、福住村境までを歩くことにした。向山の付近で行者の石像を見つけた。簡易なコンクリートで囲まれた堂の中に納められている。石像右には「宝暦四年甲戌七月十五日」と刻まれている。



板山村絵図 阿久比町誌資料編1 村絵図解説書から)

村絵図を歩く(板山村)

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

鈴なりに実った梅を収穫していた夫婦がいたので、行者像について尋ねてみる。私たちの持つている絵図を見ながら「山上」部分を指差して「田んぼを整備したときに、ここから今の場所に移されたんだよ。役行者(えんのぎょうじゃ)としてまつられ、昭和の初めころまで村の青年は奈良の吉野へ山岳修行に行ったらしいよ」と教えてくれた。額に汗して作業する夫婦と別れて先へ進む。氏神に向かった。氏神は現在の熊野神社。福山川にかかる石橋を渡り境内に入る。熊野神社の由来が書かれた看板に「社標は、熱田神宮司の角田忠行の書である。角田忠行は幕末の勤王の志士の一人で、島崎藤村の小説『夜明け前』に暮田正香の名で登場する人物である」と興味深い記述があった。入口に大きな石碑が建っていたことを思い出し引き返して、書を眺める。これが角田忠行の書か。立派な字ですねえ」と友人が隣でうなずいている。その人、有名な人なの」と

私が聞くと「全然知りません」。「ええ...」。二人で顔を見合わせ「ニヤリと笑う。本殿東の小高い丘には、酒造神の松尾皇太神の石碑があった。この日は神社で「農業祭」が営まれ、地区の人が集まっていた。社守の男性が「昭和四十年ごろまで農閑期の冬に多くの人が全国各地へ酒造りに出掛けた」と教えてくれる。なぜこんな所に「酒造神」がまつってあるのかうなずけた。板山村はその名の示すとおり絵図に「山」と記された場所が多い。小説『夜明け前』の冒頭「木曾路はすべて山の中である」ではないが、むかし、むかしその昔、板山路はすべて山の中であつたかもしれない...」。



手前が酒造神の石碑。後は山神の石碑

シリーズ

阿久比を歩く ③②



祠がまつられる若宮八幡宮跡

梅雨空の日曜日の午後、ぶらり旅に出掛けた。今回は福住村を歩いた。絵図には南端から福山川まで道路が延びている。現在の県道名古屋半田線であろう。今年一月には「福住新橋」が開通し、道路幅も広がり多くの車とすれ違う。
荒古付近の「若宮八幡宮」を探した。県道から背の高い木が目につく。その木を目標に進む。
小高い丘に二つの祠がまつられて



福住村絵図 阿久比町誌資料編1 村絵図解説書から)

村絵図を歩く(福住村)

あ
ぐ
い
ぶ
ら
り
旅

いる。津島神社と秋葉神社と書かれた札が目につく。秋葉神社の祠の前には二基の常夜灯が並べられ「福住村中安全」と刻まれている。八幡宮は民家の間に宮跡としてひっそりと残る。若宮八幡宮は大正元年に縣神社に合祀される。
細道を通り抜け、福山川に突き当たる。川は午前中の雨で増水し、泥水で濁っている。橋を渡り絵図の東西に通じる道を東へ向かう。
北側に「縣神社」と書かれた白いのぼりが何本も連なっているのが見えた。絵図に記された「氏神」である。
坂道を上る。さらに石段を上る。とても勾配がきつく息が切れる。やつの思いで縣神社に到着。
拝殿の正面には直径三十センチくらいの鈴がつり下げられていた。さい銭箱に小銭を投げ、鈴を鳴らしてから願い事をする。(何を願ったかはヒミツ)



大きな鈴がつり下がった縣神社の拝殿

一列に並んでいる。
そろそろ次の場所へ行こうかと思っていた矢先、突然雨が降り出した。友人と雨宿りをすることにする。さい銭箱横の石段に腰を下ろして雨が上がるのを待つ。静かな場所に二人きり。しゃべることもないので少し沈黙が続く。隣にすてきな人が座っていたら、静かな鎮守の森の中で楽しい会話が弾んだらうに……。しばらくして雨が上がる。私はやぶ蚊に二カ所刺され、友人は三カ所も刺される。蒸し暑かったのが、少し涼しくなった。
最後に「寺」と記された場所を訪れた。現在の興昌寺である。
山門に向かって左の行者堂から、知多四国八十八カ所の創始者の一人、福住村出身の岡戸半蔵像が顔をのぞかせている。にこやかな笑みは「お疲れさん。次回はどこに行くのかね」と声を掛けられているように見えた。

シリーズ

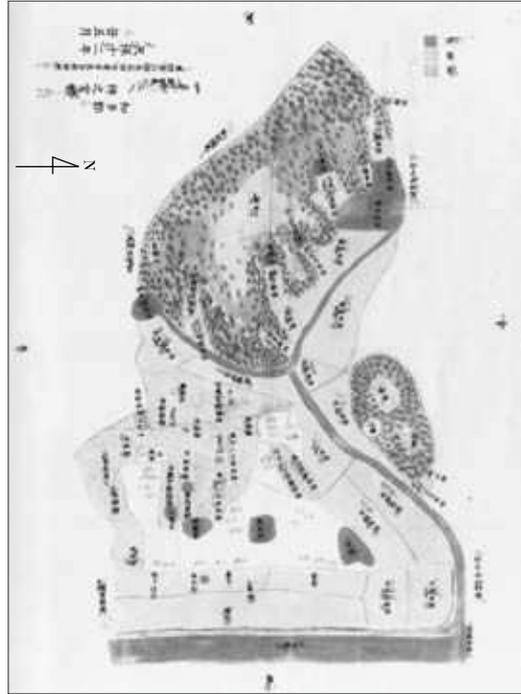
阿久比を歩く ㊦



東光寺山門

稗之宮村 現在の大字阿久比地区(絵図を見ながらぶらり旅に出掛けた。先日、東京都渋谷区郷土博物館の学芸員が最勝寺(卯之山)に伝わる、渋谷金丸が馬の口に付けたと言われる轡(むち)を調べにきていた。私も同席させてもらい轡を住職から見せてもらった。

渋谷金丸は平治二年(九〇二)野間で殺害された源義朝の家臣で、主君の義朝の首が京に送られるのを



稗之宮村絵図 阿久比町誌資料編1 村絵図解説書から)

あぐいぶらり旅

村絵図を歩く(稗之宮村前編)

境内の東の方には、細い参道が続く。昨日の夜、雨がたくさん降ったせいか、木の葉から「ポトン、ポトン」と水滴が落ち、顔や首筋に当たる。蒸し暑いため、この一滴、二滴のしずくが一瞬体を冷やし気持ちがいい。

知り、首を取り返そうと京に向かうが、馬が病で倒れ進むことができない。轡を井戸で洗って、「古見堂地蔵」(現在、最勝寺蔵)に献じると、馬の具合が良くなり、再び京を目指したという伝説が残る。

稗之宮村絵図の中央から南の部分「轡井戸」の表記がある。今回は轡洗い伝説の地を最終目標に進むことにする。

最初に氏神と記された場所を訪れる。現在の阿久比神社である。この神社は平安時代初期の朝廷の記録が書かれた『延喜式第九・第十』の中で、全国の神社を紹介する神名帳に南知多町の入見神社、羽豆神社とともに「智多三座」として記載されている。



阿久比神社東側の森

南へ向かって歩く。草取りをする女性に出会う。「轡井戸」について何か知らないか尋ねてみる。「ごめんね嫁いできて四十年経つけど、聞いたことないね」と女性がニコニコしながら応えてくれた。「がんばって探してね」と励まされる。

見上げるほど高い場所に東光寺の山門がある。とても急な石段を上っていく。途中で友人がぼそつと「ところで、轡って何ですか」と私に尋ねる。「えっ・・・」、絶句。(先ほどまで普通に会話し、うなずいていたのはどういうことだ。)

恥ずかしいことに私も知らなかった。先日、学芸員に聞いた話を説明した。轡とは口輪の意。馬の口にくわえさせておき、手綱をつけて御するのに用いる金属製の具。『広辞苑』から。

東光寺境内には今年初めて聞くクマゼミの鳴き声が響き渡っていた。轡井戸探しのぶらり旅は次回へつづく。

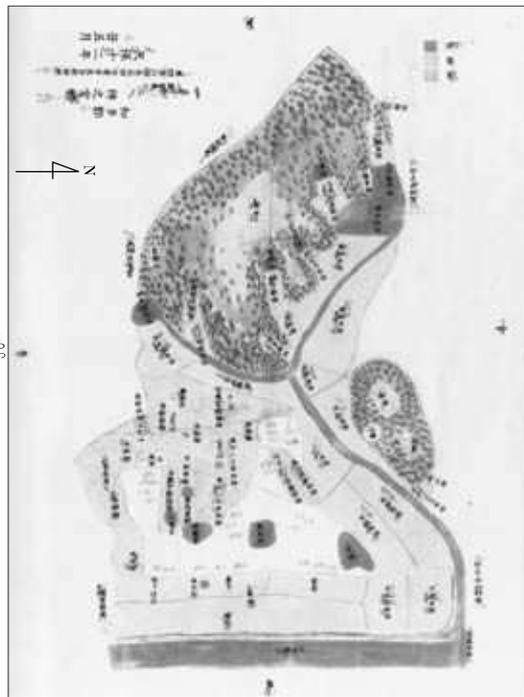
シリーズ

阿久比を歩く ③④



丘陵地からの眺め

〃轡井戸〃探しのぶらり旅を続ける。
東光寺のクマゼミの鳴き声を後にして、地蔵寺へ向かう。断崖絶壁の下に細道がくねくねと続く。道は丘陵地にあるため、眺めは絶景である。道は、絵図に地蔵堂と記された現在の地蔵寺に続く。
地蔵寺も小高い場所にこぢんまりと建つ。境内に弁才天と庚申がまつられた小さな祠がある。二つとも村



稗之宮村絵図 阿久比町誌資料編1 村絵図解説書から

村絵図を歩く(稗之宮村後編)

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

絵図に記されている。明治以後この場所に移されたらしい。
私たちが境内をうろついていると、女性の住職が声を掛けてくれる。村絵図を見ながら歩いていることを説明する。無理を言って寺にあらがせてもらい、本尊の地蔵菩薩を見せてもらう。
木造で高さ一メートルほどの地蔵菩薩。住職の話によると、記録が残っていないため詳しいことは分からないが、約四百年前に造られたとのこと。全体が黒色で背が高く、スマートな、地蔵さんである。
轡井戸について住職に尋ねる。私は出身が名古屋だからねえ」と言う答えが返ってくる。がっかり肩を落として次へ向かおうと絵図を見る。「こころうさまね。冷たいものでもどうですか」と缶コーヒートを勧められる。遠慮なくごちそうになる。よく冷えた缶コーヒートを額に当てると、とても気持ちがいい。一瞬、汗が引く。缶コーヒを一気に飲み干し、疲れが取れる。気分を一新した



轡井戸があったと思われる東中根の田

ところで最終目的地を目指す。
轡井戸について阿久比町誌村絵図解説書には「阿久比字東中根にあった。この井戸は、源義朝家臣渋谷金丸の轡洗い伝説がある井戸である。現在は取り壊されて田になっているが、今でも井戸のあった所からは清水がわき出すために稲が実らないといわれている」とある。
阿久比公会堂の前を通り、地図を見ながら東中根付近の田を探す。墓地から北東の方角に田を発見。
マムシが出そうな草道を下へ降りる。田に張られた水は、ほかの田に比べると水量が多いような気がする。解説書どおり清水がわいているのだろうか。「この辺ですよね」自信のない友人の声。絶対そうだよ。間違いない。私は意味もなく友人に握手を求めた。
伝説の地は最終的に確認できなかった。残念。私たち自身が何か伝説を残せるように、田の脇を流れる水路で手を洗い、帰途に就く。

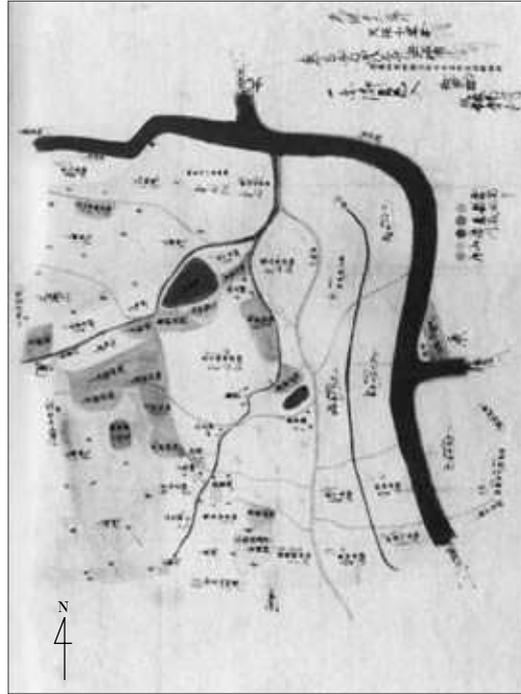
シリーズ

阿久比を歩く ㊤



城山公園で虫取りを楽しむ親子

今回は坂部村の村絵図を見ながら
ぶらり旅に出掛けた。
最初に、久松佐渡守古城跡（城は
徳川家康の生母於大の方の夫久松俊
勝が築城）と記され、現在は城山公
園となっている場所を訪れる。
盆を過ぎて暑い日が続く。セミ
の鳴き声がにぎやかだ。公園ではタ
モを持つた親子が虫取りを楽しんで
いる。幼い子が自慢げに捕まえたア
ブラゼミを手に持って見せてくれる。



坂部村絵図 阿久比町誌資料編1 村絵図解説書から

村絵図を歩く（坂部村編）

あ
ぐ
い
ぶ
ら
り
旅

公園内にひっそりと建つ石碑が、城
のあったことを物語っている。
次に洞雲院に向かう。境内を通り、
於大の方の遺髪墓などが並ぶ久松・
松平家葬地に着く。何度も訪れてい
るが、いつ来てもこの一帯だけに木
漏れ日の光が射し込む、幻想的な場
所である。
洞雲院の裏山から道が、八幡神社
へと続いていた。村絵図に記されて
いる氏神がこの場所のようだ。背の
高い木がうっそうと茂る、静かな森
の中に神社がある。
拜殿前の広場はゲートボール場に
なっている。森の中であるせいか、
陽があまり当たらず、夏にゲート
ボールを楽しむには最適な場所なの
かもしれない。ここでもセミの鳴き
声はにぎやかだ。
阿久比町誌村絵図解説書には、
「阿ら畑」にある塚に月宮姫の墓、
通称「お塚さん」と言われる観音像
が安置され、祈ると美人になるとの
伝説が残るとある。この「お塚さん」
を探すことにした。

村絵図と現在の地図を見比べると、
「阿ら畑」は現在の「東新畑」辺り
ではないかと考え、その周辺の畑を
歩いた。
畑で仕事をする男性に「お塚さん
と呼ばれている観音像を知りません
か」と尋ねる。「これだよ」と、言
われる。土が盛られて塚になってい
る前に高さ五十センチ程の石造。まさ
に探していたものが目の前にある。
偶然にも出会ったこの男性は、先
代からこの観音像を世話していると
話してくれた。「女性がこの観音像
に祈ると美人になるそうですが」と
聞くと、「そんな風には言われてい
るみたいだね」と笑顔で答えてくれる。
「そういえば坂部地区の女性は美
人が多いですよ」と友人がいつも
のように調子のいいことを口にする。
今回のぶらり旅では、残り少ない
夏を惜しむかのようにセミの鳴き声
がとてにぎやかだった。最後に山
之神を訪れたが、数えただけで十匹
以上のアブラゼミが木に止まってい
た。どこへ行ってもセミの声が聞こ
えるはずである。



「お塚さん」と呼ばれている観音像

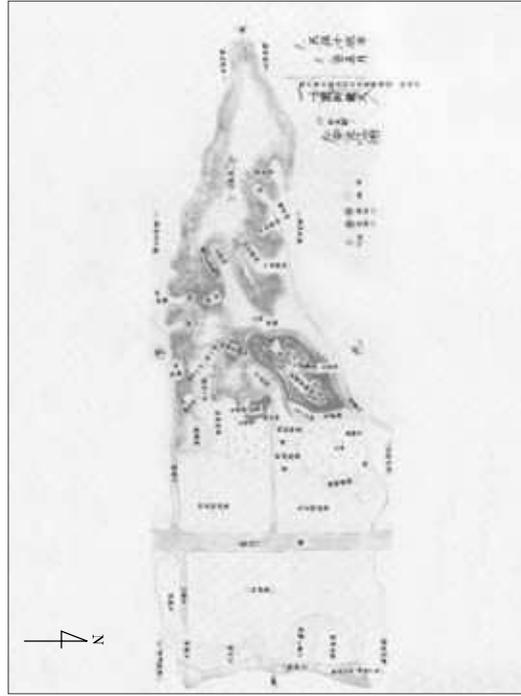
シリーズ

阿久比を歩く ③⑥



ハスが並ぶ弘誓院境内

千二百年ほど前(弘仁年間)、比叡山を開いた伝教大師(最澄)は、教えを広めるため全国行脚をする。あぐいの郷にも立ち寄り、池のほとりにさしかかると、池の中央から金色の光が立ち昇り、どこからともなく現れた白兔が光めがけて飛び込み、一寸七分(約五センチ)の阿弥陀仏を口にくわえて、大師の前に運んでくる。その出来事を帝に話す。帝は大変



卯之山村絵図 阿久比町誌資料編1 村絵図解説書から)

村絵図を歩く(卯之山村前編)

あぐいぶらり旅

喜び、池のほとりに勅願寺を建て、兔養山長安寺と名付けるよう命じる。「阿久比の昔話」兔の運んだ仏様に詳しい。卯之山の地名は兔養山の山号にちなみ「兔之山」と呼ぶようになったと伝わる。今回はその卯之山村絵図を見ながらぶらり旅に出掛ける。まずは卯之山村の名前の由来が深い、兔養山弘誓院を訪れる。

境内入口には書道の上達を願い、使い古した筆を供養するために建立された「筆塚」がある。石碑の筆塚は見上げるほど背丈が高い。私も友人も筆無精。筆まめになれるようにペンを筆塚の方にかざし、頭を深く下げる。

副住職とお庫裏さんに話を聞く。兔養山長安寺として伝教大師が建立したと伝わるこの寺は、もともと天台宗ということもあり、織田信長が比叡山延暦寺を焼き討ちした時代に、何度も兵火で焼失したらしい。昔話に出てくるウサギがくわえていた仏はどこかに残っているのか尋ねる。友人もたまにはまともなことを言う。少し見直した。) 次回へ続く。

金色の光が立ち昇ったと言われる池は、村絵図に記された「下之池」ではないかと聞いたので、次に池に向かうことにする。木陰に入ると、風はさわやかな秋風。ツクツクボウシの鳴き声が響く。「おおいつくつく」と聞こえますよねと、友人が言う。「そうかな、ちくちくぼうしと聞こえるけどなあ」。たわいない話をして歩を進める。「広辞苑」には七月末から九月末まで「おおいつくつく」と鳴くとある。友人もたまにはまともなことを言う。少し見直した。) 次回へ続く。



筆塚の石碑

シリーズ

阿久比を歩く ③⑦



「かんの虫封じ」のために積まれた柄杓 最勝寺境内)

「前編から続く」
 下之池に着く。「おおいいつくつく？」とセミの音が響く。
 しばらく池を眺める。友人が「今日は白ウサギが現れて、私たちに豪華プレゼントを運んで来ないですかね」と真剣な顔をして私に言う。「多分来ないだろうね・・・」。会話が途切れる。
 池のほとりに役行者の石像がまつられる。昔からこの地区の若者は、



卯之山村絵図 阿久比町誌資料編1 村絵図解説書から)

あぐいぶらり旅

村絵図を歩く(卯之山村後編)

奈良県の大峰山へ山岳修行に徒歩で出掛けたことが石碑に記されている。一匹の赤トンボが石碑に止まり羽を休めた。池の周りには気持ちよさそうに、たくさん赤トンボが飛んでいる。再び二人で池をほんやりと眺めた。
 阿久比スポーツ村の方へと歩く。一回りして、雑木林を通り東へ向かう。途中の畑には大きなトウガンがごろごろしているのが目に付く。草取りをする女性と目が合い軽く会釈を交わす。
 舗装された道に出る手前で「お地藏さん」を見つめる。石像の地蔵で、背後にコンクリートで三角の屋根が作られているが、雨風はしのげず、野ざらし状態になっている。ペットボトル二本に花が供えられ、胴体は布が巻かれている。いが栗が転がっていたので拾って供える。一人ぼっちの「お地藏さん」の表情はどこかさみしそうに見える。後に地元の人に聞いた話では、地蔵尊には「右くさぎみち」「左大のみち」と刻まれ、

草木地区と常滑市の大野へ行く道を示す、道しるべの役割を果たしていた(そうだ。)
 最後に最勝寺を訪れた。稗之宮村絵図を歩いたときに轡井戸を探した。源義朝の家臣、渋谷金丸が馬の口に付けたと言われる轡を保管している寺である。
 野間で殺害された、義朝の首を取り返そうと金丸は京に向かうが、馬が病で倒れ進むことが出来なくなる。轡を井戸で洗って「古見堂地蔵」に献じると、馬の具合が良くなり、再び京を目指したという伝説が残る。「古見堂地蔵菩薩」は最勝寺の本尊。境内西の本堂に安置され秘仏となっている。
 建物の中にたくさん柄杓が積まれている。子どものかんの虫封じのために奉納する柄杓です。口伝えて皆さんが祈とうにきますよ」と住職が教えてくれた。
 「かんの虫封じって何ですか」と友人が尋ねてきたので、私は「腹の中にあるバイキンマンを退治することだよ」と笑って答えた。



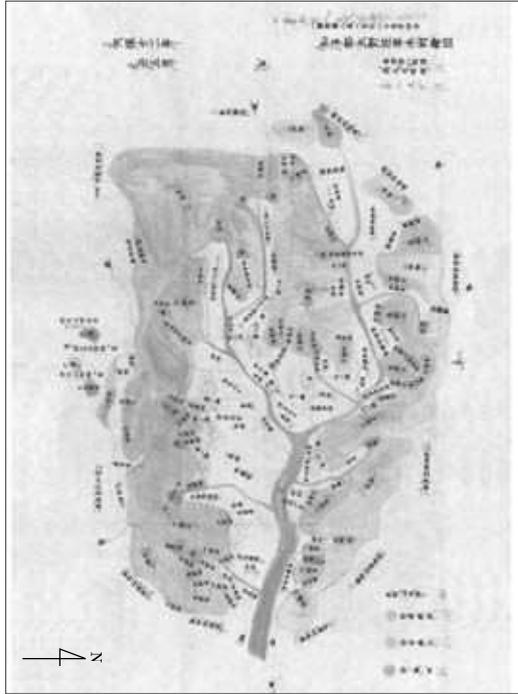
地蔵尊石像

シリーズ

阿久比を歩く ㊸



正盛院山門



草木村絵図 阿久比町誌資料編1 村絵図解説書から)

十月の最初の日曜日、草木村絵図を見ながらぶらり旅に出掛けた。天候はあいにくの雨。頭を垂れる黄金色の稲穂に、雨粒がいつそうの重みを加えている。田んぼの土手には彼岸花が咲き、季節はすっかり秋。秋の景色を眺めながら、最初に「八幡森」と記された場所を訪れた。現在この地区の氏神に当たる八幡神社である。

この神社には、織田信長の家臣前

村絵図を歩く(草木村前編)

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

田利家が桶狭間の合戦で今川義元に勝利した後「わが身の運が良かったことのお礼」にと刀一本と幡一片を寄進した記録が残っているらしい。阿久比の地には、歴史上に名を残した人物が意外にも多く訪れていることに驚かされる。

草木村絵図には三つの寺が記されている。阿久比町誌村絵図解説書には東から正盛院、竜光寺、浄土寺とある。「八幡森」の近くに記されている「寺」、正盛院を訪れる。

山門をくぐると、きつい匂いが鼻を刺激する。右手には立派なイチヨウの木。葉っぱが雨とともに空から降ってくる。「この匂い、銀杏です」と友人が言う。「グチャ。ジャリッ」と音が響く。私が何か踏んだようだ。「実を踏んで、その中の銀杏の殻を踏んつけた音ですよ」と友人が教えてくれる。私は今まで銀杏は、硬い殻に入った実が木から落ちてくるものだ信じて疑わなかった。「それっていつから」と聞くと、「ええ。。。」。友人は不思議な顔を



「八幡森」と記されている現在の八幡神社

をする。

山門と仁王像は町指定文化財である。「この二つは、正盛院の末寺であった竜光寺にあったが、明治十五年、竜光寺が廃寺となったために正盛院に移される。

山門と仁王像がもともとあった場所を探す。草木小学校の西周辺を歩いていると薬師堂を見つけた。雨降りの中、稲刈りに出掛けるというおばあさんに出会えたので、話を聞いてみる。「ここにあった山門や仁王さんたちは正盛院に移されたと聞くよ。私が嫁にきたときには、もうなかったよ。薬師堂が建っている場所に古いお寺さんがあってね、昭和二十五年くらいまで近所の人たちが集まって、芝居や余興を楽しんだよ」と昔を懐かしみ、話してくれる。

別れ際に「雨の中、お仕事大変ですわね」と声を掛けると「年を取っても働けるうちはね」と笑顔で私たちに手を振ってくれた。

「実るほど頭を垂れる稲穂かな」次号に続く。

シリーズ

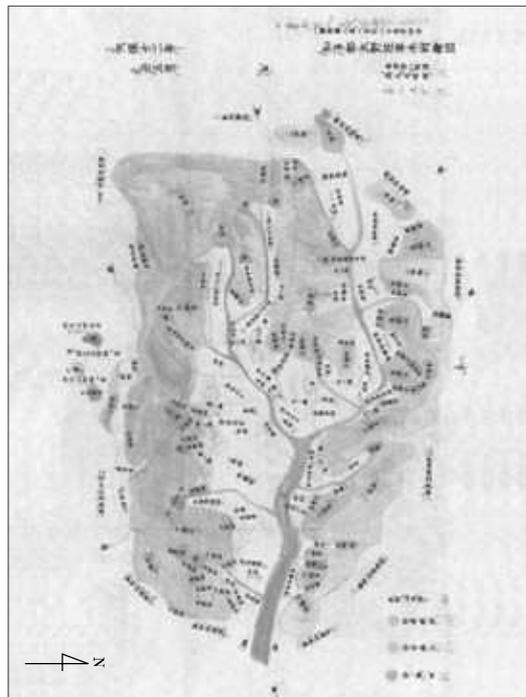
阿久比を歩く ③9



現在は畑となっている浄土寺跡

前編では、草木村絵図にある三つの寺のうち、正盛院と竜光寺跡を訪れた。今回は、最後の一つ浄土寺と草木城があったとされる場所を探しにぶらり旅を続けた。

阿久比町誌村絵図解説書に、浄土寺は「正盛院の開創と同時に正盛院末寺となったが、明治二十年（一八八七）には南知多町豊浜小佐に寺を移して廃寺となり、跡地は現在、畑となっている」とある。村絵図には



草木村絵図 阿久比町誌資料編1 村絵図解説書から

村絵図を歩く(草木村後編)

あ
ぐ
い
ぶ
ら
り
旅

芳池川沿いに「寺」の表記があるの
で川の周辺を歩く。

耕運機で稲刈りの終わった田を耕す男性がいたので声を掛けて、浄土寺のことに付いて尋ねてみる。西の方を指差して「家の後ろにハウスがあるだろ。あの辺りの畑が寺だったらしいよ。わしらが若いころには、若衆蔵」があつて草木の西側に住む若者が集まって祭り太鼓の練習や芝居を楽しんだなあ」と話してくれた。

解説書通り、浄土寺跡地は畑になっていることが分かったので、教えてもらった場所に向かう。

家の前で収穫したばかりの籾を、天日干しするおばあさんがいたので、再び寺のことを尋ねる。先ほどの男性と同じ話が返ってくる。その場所を案内してもらう。

おばあさんは「この辺りはよくムシがでるよ。昔から捕まえていた癖で、ここを通るときはいつも下を向いて歩いているんだよ」と笑いながら話す。友人はなぜか私の後ろを歩き、いつもニヤニヤしている顔が

こわばり、口数が少なくなる。
現場は畑となっている「イモが植わっている所まで蔵だったかなあ」と、説明してくれる。寺や若衆蔵があつたという形跡は残っていない。

最後に草木城跡を探す。芳池南の小高い丘の上で、現在の上竹林、下竹林付近という手掛かりをもとに歩を進める。

「あの竹林の丘、あやしくありませんか」と、いつものニヤニヤした顔で友人が言う。民家の敷地を通らなければ行けない場所なので、家を訪ね事情を話す。皆さん城があつた場所だと言つて見に来ますよ。どうぞ見てきてください」と、快く女性が応じてくれる。

最終目的地に着く。小高い丘から見ると眺めは絶景で下界は城下町。二人は殿様になった気分分度腰に手を当て、しばらく高笑いを続けた。



草木城跡だったとされる場所から眺めた景色

シリーズ

阿久比を歩く ④



北原天神に建つ石碑

天保十二年(一八四一)に描かれた阿久比村十六カ村の村絵図を見ながら歩くシリーズもこれまで十五カ村を歩き、残すは白沢村一つとなった。その白沢村絵図を見ながらシリーズ最後のぶらり旅に出掛けた。菊薫る秋。民家の軒先には丹精込めて作られた菊の鉢が並ぶ。最初に「寶安寺」と記された現在の寶安寺を訪れる。花に水を掛ける「お庫裡さん」に声を掛け、寺にまつわる話を聞く。



白沢村絵図 阿久比町誌資料編1 村絵図解説書から)

村絵図を歩く(白沢村編)

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

町指定文化財「円空仏」を所蔵している寺でもあるので、その仏を見せてもらうことにする。円空仏は薬師如来である。十一月八日は薬師さんの命日で、毎年前日に餅をついてお供えをします。当日の夜、地区の人たちが集まり、お参りをした後に餅を持ち帰り食べると、一年間健康に暮らせると言われて「ますよ」と話してくれながら円空仏が安置されている場所まで案内してくれる。厨子の扉は開かれ、その中には仏がふくよかな顔立ちで、につこりとほほ笑んで膝の上に結んだ手をのせて座っている。なぜこの寺に円空仏があるのか尋ねると「江戸時代、円空が旅の途中に白沢村の庄屋さんの家に泊まり、貧乏僧だった円空はお金の代わりに仏を残していきました。庄屋さんが自分の家では成仏できないから寺で預かってほしいと持ってきたらしいです」と説明してくれる。目の病気を治す不思議な力を持つ「薬師さん」として口伝えに広がり

参拝人が絶えないとのこと。仏頂面とは違う一風変わった、どこか憎めない円空仏の顔をしばらく眺める。「八幡宮」と記された現在の八幡社に行き、最後に「天神」と記された現在の北原天神を訪れた。北原天神は、天曆九年(九五五)菅原道真公を祭神として英比庵住居跡に建てられたとされている。天神のシンボル「牛像」が境内奥にどっしりと構えている。今さら賢くなるとも思えないが私は牛の頭をなでる。友人は「のどが痛くて鼻水が出る」と言っ、牛のあごの辺りをまんべんなくで回し、鼻の穴を触っていた。天神は学問の神であるはずだが・・・。



寶安寺所蔵の「円空仏」